

小-27

### てんかん重積後に大脳皮質層状壊死の発生が疑われた犬1症例

○堀 あい<sup>1)</sup> 三好健二郎<sup>1,2)</sup> 華園 究<sup>1,2)</sup> 中出哲也<sup>1,2)</sup>

1) 酪農大附属動物医療センター 2) 酪農大伴侶動物医療学

【はじめに】てんかん発作の原因究明にMRI検査を用いることは獣医療においても一般的になりつつある。てんかん発作後の頭蓋内へ影響は広く知られており、主に梨状葉や海馬の信号変化が報告されている。今回我々は、てんかん重積後に梨状葉、海馬に加え大脳皮質の壊死を疑わせる病巣を認めた症例に遭遇したので、その概要を報告する。

【症例】雑種犬(チワワ×ミニチュア・ダックスフンド)、5歳齢、去勢雄、体重2.5kg。突然のてんかん重積を認め(第0病日)、翌日精査希望で紹介来院した。来院時、症例は虚脱し昏睡状態であり、身体検査にて高体温(39.7℃)および重度の脱水による低血圧と頻脈がみられた。血液検査では低血糖(33mg/dl)、高窒素血症、代謝性アシドーシスによる高K血症を認めた。神経学的検査では顔面知覚の低下、瞳孔不同、対光反射の低下がみられ、犬種・年齢を考慮し、脳炎や水頭症の除外診断として無麻酔MRI検査を行った。MRI検査では、左右の梨状葉、海馬、左側頭葉領域におけるT2WI/T2FLAIRの軽度高信号が認められた。同部位はT1WIで等信号、ガドリニウムによる造影増強効果を示さなかったため、特発性てんかんによる発作後の影響と考慮し、抗てんかん薬により加療を行った。その後、症例は発作が見られなかったため、抗てんかん薬のみの治療を継続し、第38病日再MRI検査を行った。左右の梨状葉はT2WIにて高信号、T2FLAIR/T1WIにて低信号、造影増強効果を示さず、左右対称性に認められた。右前頭葉、右後頭葉においても同様の所見がみられた。一方、左側頭葉は、脳表に沿った灰白質領域に広範囲の信号変化を認めた。また、MRAで同側中大脳動脈の血流増加を認め、MRSでN-アセチルアスパラギン酸(NAA)の低下を認めた。脳脊髄液検査で、抗アストロサイト抗体は陽性、蛋白濃度は軽度上昇(31.6mg/dl)していたが、再検査後も発作や神経症状はみられず、抗てんかん薬のみで良好に経過した。

【考察】本症例はてんかん重積に加え、低血糖、重度脱水、低酸素血症といった代謝性疾患を併発しており、抗てんかん治療のみで経過が良好であることから左側頭葉の所見はそれら複合した要因で発生した層状壊死と考えられた。MRAやMRS所見もヒトの低血糖や一過性脳虚血が原因で認められる所見と類似しており、本症例も同様の病態による大脳皮質壊死を起こした可能性が示唆された。